お導きとともに歩くということ

中学一年　安田　彩乃

私が今まで歩いてきた道。そしてこれから歩いていく道。そのどちらにも、ほとけさまやご先祖さまの温かな思いがあふれている。このことに気づかせてくれたのは、旅行先で出会った一人のおばあさんだった。

私は今年の春、家族旅行で沖縄に行った。どこまでも続く青い空。四月なのに夏を思わせる熱い日射し。見るものも食べるものも、全てが新しい発見に満ちていて、私は、沖縄のとりこになった。海で遊んだり、マングースの森を探検したりしながら、春休みがずっと続いたらいいな、と思っていた。

たくさんの楽しい思い出とともに、いよいよ自宅に帰る日。私たちはお土産を選ぶために市場へ出かけた。買い物を済ませて、小さなベンチで一息ついていた時、隣のお店からおばあさんが話しかけてくれた。

「沖縄はいいところでしょう。」

おばあさんはそう言って笑った。私も大きくうなづいて、また来たいです、と言った。するとおばあさんはきゅっと口をひきしめて、

「沖縄が楽しいのは、戦争で亡くなったご先祖さまが見守っているからね。」

と言った。私は学校で学んだ沖縄戦の話を思い出した。たくさんの島民の方が犠牲になった、悲しい歴史だ。私が何も言えずにうつむいていると、おばあさんがふいに、

「ご先祖さま、見たことがあるかね。」

と尋ねた。私は祖父の家を思い出して、写真で見たことがあります、と伝えた。すると、おばあさんは笑って、

「今もここにおるでしょう。ほら、お姉ちゃんの足元。」

と言って私の影を指さした。沖縄の強い太陽に照らされて、白い地面に、くっきりと黒い影が映っている。おばあさんが、

「その足で歩いてきた道は、ご先祖さまにつながっている。沖縄の影が濃いのは、たくさんのご先祖さまが見守ってくれているから。これから歩いていく道も、きっと太陽のように照らしてくれる。お姉ちゃんもご先祖さまを大切にしてね。そして、沖縄でまた会おうね。」

と言った。私は、おばあさんの穏やかな笑顔の向こうに、沖縄の方が抱えている戦争の悲しみを知った。そして、亡くなった方の思いと共に歩んでいく、沖縄の方の温かさも。私は、この温かな思いを忘れな

い、という決意をこめて、はい、と力強く答えた。

私たちは、普段から身近な人への感謝を忘れることはない。でも、私たちを見守ってくださるほとけさまやご先祖さまに気づく人は少ないのではないだろうか。沖縄でのおばあさんとの出会いは、私を大きく変えてくれた。これからも、ほとけさまやご先祖さまの温かなお導きを感じながら、周囲への感謝の気持ちを忘れずに過ごしていきたいと思う。